

# 虹

に

## 移住で迷いなき人生

### ②08 朝日の「農山村マルチワーカー」

山の麓は静かで、鳥のさえずりが時折聞こえる。6月初旬、朝日町にある養蜂場。服部 大介 さん(50)が巣箱の上ぶたを開け、木の枠を取り出す。セイヨウミツバチがびっしりと枠に群がり、無数の羽音が重なり響く。1枚に2000匹ほどいるといい、養蜂場全体で20~30万匹にも及ぶ。

服部さんは手にした燻煙器のふいごを押して煙を吹きつける。煙を避ける働き蜂たちの隙間から、黄金色の蜜が詰まっている巣の状態を見る。

「うん。いい」。服部さんがつぶやく。枠を1枚ずつ取り出して女王蜂を探し、ダニがいはいか確認し、蜂をつぶさないようにゆっくりと巣箱に戻す。遠くで正午を知らせるサイレンが鳴っても、1人で作業を続ける。ネットに覆われた顔に汗がにじむ。

服部さんが脱サラし、妻の彩子さん(43)と共に静岡県から朝日町に移住して10年がたつ。養蜂だけではなく、サツマイモなどを販売し、農事組合法人でも働いて生計を立てる。肩書は「農山村マルチワーカー」だ。

◇

幼い頃は父の転勤で全国を転々とし、幼稚園から高校までは兵庫県姫路市で暮らした。小さな頃からNHKの番組『シルクロード』が好きだった。大乘仏教がインドから中国へと伝わった歴史を知り、土地に縛られずに暮らす遊牧民にロマンを感じた。進学したのは京都にある龍谷大で、興味があった仏教の学科を選んだ。

就職活動では「終身雇用で安定してそうな会社」を受けた。仕事が面白くなくても、我慢して働くのが大人の考え方だと思っていた。就職氷河期の中で内定が出たのは、眼鏡店をチェーン展開する会社だった。初めは京都の店に配属され、新店を出した静岡に転勤。店長を任せられた。

他社の出店攻勢を受け、業績が悪化した会社は静岡の一部店舗を撤退。多くの同僚が会社を去った。服部さんは休みが少なく、先行きが見えない会社を退職した。

リーマン・ショックの影響で就職口は少なかった。静岡に残ってメーカーに就職し、工場の現場で働いた。職場の環境は悪かった。先輩から仕事を押しつけられ、業務の期日も勝手に短縮された。ワンマン社長の思いつきの仕事にも振り回される。離職率の高い会社だった。

「この会社でしか使えない技術に習熟し

たところで、いいことがあるのだろうか」という思いが常にあった。我慢を重ねて7年。会社に期待を抱かなくなっていた。

前の会社の後輩だった彩子さんと結婚し、家庭を持った。転職したいが、踏ん切りがつかない。「最初に入った会社は経営が傾き、再就職した会社はブラック企業。また転職してもブラック企業だったら同じことの繰り返しになる」

生き方を模索した。農業をしながら残りの時間を自分のやりたいことに費やす「半農半X」の本を読み、小さな商売を組み合わせた働き方を提唱する人の講座を受けた。正社員にしがみつかず、自分で仕事を作って生きたいと考えるようになった。

◇

妻の彩子さんは、工場に転職した服部さんの変化を感じていた。痩せ細り、ネガテ



「清涼 西治子」

ィブな発言が増えた。夫は夜勤だが、自分は日中の勤務。アパートに2人で暮らしているが、顔を合わせる時間は少ない。

ある日、風呂場から低くくぐもった話し声が聞こえてきた。何かと思って耳を澄ますと、服部さんが般若心経を唱えていた。夫が限界だと感じた。

しばらくして、服部さんから話を切り出された。「会社勤めをやめ、自分で稼げるようになろうと思う。そのために移住先を探そう」。ただ、静岡出身の彩子さんは実家や友達もいる故郷から離れることにためらいがあった。

2人で東京で開かれた移住フェアに参加した。各地の移住相談員がはつらつと地域の魅力を紹介している姿を見て、彩子さんの考えが変わった。「違う所で違う人生を

始めるのも楽しいんじゃないか」。何よりも、夫のことが心配だった。

全国各地の移住体験ツアーに参加する中で印象に残ったのが、朝日町で行われた「とやま帰農塾」だった。地元の農産物で料理を作り、地域のお年寄りたちと触れ合い、寺に泊まった。温かい雰囲気が心地よかった。朝日町の自然体験学校「夢創塾」の長崎 喜一 さんら個性的な人たちとも出会い、面白そうな町だと思った。

朝日町が農業分野の「地域おこし協力隊」を募集していることを知った。服部さんに農業の経験はないが、初心者でも受け入れてくれるという。服部さんは少し早急な気がしたが、彩子さんが強く後押しした。

◇

服部さんは39歳で新たな人生を踏み出した。空き家に引っ越し、地域の活動にも積

極的に参加した。

職場は、米や大豆を生産する農事組合法人。当初は言われた作業をこなすだけで精いっぱいだった。仕事をしながら草刈り機やトラクターなどの使い方を教わり、農作業の基本を学んでいった。

ただ、服部さんの最終目標は雇われることではなく、自分で仕事を作ることだ。農事組合法人や町役場にその思いを伝えた。

隊員の任期最終年の3年目は農事組合法人で働く日を減らし、養蜂に取り組むことにした。以前訪れた岡山の農村で見た養蜂の巣箱が記憶に残っていた。本を読み、県内の養蜂家からアドバイスを受けた。蜂蜜は常温でも腐らず、非加熱の国産品は需要がある。大量生産ができないため、企業との価格競争を避けることができる。



朝日町で養蜂に取り組んでいる服部さん

知人から借りた土地で、養蜂を始めた。その話を聞いた町内の人が山裾の休耕田を無償で貸してくれ、巣箱を置くスペースにあずまやまで造ってくれた。

服部さんが移住してから家族ぐるみの付き合いがある朝日町の 石橋 芳和 さん(78)と竹美さん(78)夫妻は「服部さんも奥さん(いしはしよしかず)も人柄が穏やかで、地域に積極的に関わっているから、応援してくれる人がいる」と言う。

◇

瓶詰めした蜂蜜は「里山蜜」として新川地域にある農産物の直売施設や観光施設などで販売している。3年前は予想以上の量が採れ、収入はサラリーマン時代を超えるほどになった。ただ、その後は不作が続く、今は群れを増やそうかと考えている。

蜜蜂は世界的に減少し、原因の一つが農薬とされる。服部さんの養蜂場は田んぼから離れた場所にある。農事組合法人では、蜜蜂に影響を与えるカメムシ防除の農薬を使う仕事は外してもらっている。

借りた畑でサツマイモを栽培し、農閑期はショッピングセンターなどでつぼ焼き芋を販売。ひょうたんも栽培し、穴をくりぬいたスピーカーも作り、今年から売り出す予定だ。気候に左右されずに生計を立てるために知恵を絞る。

彩子さんは町の移住相談員などをしながら、夫の仕事を支える。「普段から『あれやりたい、これやりたい』って言うているので、たぶんこれが一生続いていくんだろうとは思いますよ」と笑う。

移住して10年。この町で家族が増えた。夫妻は空き家の一軒家を購入し、子ども2人と愛猫と暮らす。昆虫を捕まえて喜ぶ長男の晴仁さん(7)と、話せる言葉が増えてきた長女の花ちゃん(2)の笑い声、2人がドタドタと家の中を走り回る音が響く。

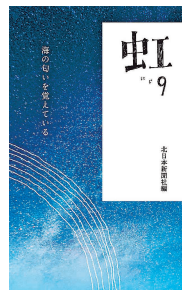
服部さんは自分の選択は間違っていないかと思う。もちろん、自然相手の仕事は思い通りにならず、苦労は多い。だが、こう言い切る。「誰かに言われたわけでもなく、自分が決めたこと。迷いがなく生きていけるのは幸せです」

服部さんが個人事業主として用いる屋号は「うし太郎信繁」。彩子さんが愛猫に名付けた「うし太郎」に、服部さんが好きな大河ドラマ『真田丸』の主人公「信繁」を組み合わせたそうです。ユニークな屋号からも、夫妻の人柄がにじんでいます。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社  
メディアビジネス局



#### 「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50  
北日本新聞社西部本社「虹」係  
FAX 0766-25-7773  
mail niji@kitanippon.jp  
次回掲載は9月1日(火)です。